

世の中不景気になれば商売は難しくなる。不景気のせいではなく、環境が変わっても店の売れ行きは激変する。新しい道路が出来たり、駅の出口が反対側になったりすると、老舗が「暖簾を下ろす」羽目になるのはよくある。もう少し小さい規模なら「店をたたむ」ことになる。インドネシアの露天商は“mengulung tikar”（ござを巻いてしまう＝倒産する）ということで、夜逃げの必要も無い。

「一石二鳥」、世の中には結構あるもんだ。インドネシアでも“Sambil berdiang, nasi masak.”（魚か何かを炙りながら同時に飯を炊く）と食い意地の張っているところは微笑ましい。

「頭隠して尻隠さず」。日本ではこの阿呆な動物は雉だが、インドネシアでは“Sembunyi tuma, kepala tersuruk, ekor kelihatan.”（ノミは隠れるに頭を潜り込ませて尻を見せる）と随分小さな生き物を持ってきた。尤も彼らの目のいいのには驚かされる。月明かりでも新聞が読めるのではないかと思うほどである。

臭い物には蓋をせよと、ある国の霞んだ閑所の高級官僚はせっせと蓋をしてきたが、「悪事は必ずばれるもの」。あのインドネシアでも“Mana busuk yang tidak berbau.”（臭いのしない腐れ物があるのか）と言っています。「当たり前」のことじゃないかとインドネシアの鶏だって“Ayam berkokok hari kan siang.”（鶏が鳴けばもう昼間＝当たり前のこと）と呆れています。

「阿呆」や「馬鹿」は単純に頭が空っぽなんだ。インドネシアでも同じ意味で、“kepala angin(空っぽの頭)”とか“kepala udang(エビの頭＝大きいが中身は空っぽ)”という。

頭が出たついでに、「手癖が悪い」は“tangan panjang”、「痴漢」のお手手は“tangan monyet”、強力な助っ人「右腕」は文字通り“tangan kanan”。

言い訳文化の典型的な表現に“Tak ada gading yg tak retak.”（ひびの入ってない象牙は無い＝完全なものはない）というのがある。神ならぬ身であるからには間違いの無いことなんかあるはずが無いと、論説をぶつ時でも自信を持って堂々という。これに対応する日本語を、「記憶がありません」「忘れしました」「聞いていません」ととぼけることだということ、ブラックジョークになってしまうかな？

「顔に泥を塗られる」と誇り高き御仁は不快感をもらす。インドネシアも自尊心では負けていません。同じように“Mendapat arang di muka.”（顔に炭を塗られる）といい、泥が炭に代わるだけ。

何故か最近目立つ DV こと「家庭内暴力」。インドネシア語に“Memukul kucing di dapur.”（台所で猫を叩く）なる表現があるが、何処でも八つ当たりは弱い方に向く。しかし、サザエさんの歌を思い起こすならば笑える光景ではある。

「肩の荷を下ろす」とは日常生活でもよく出くわす。“Bagai melulusi baju sempit.”（窮屈な上着を脱ぐ＝困難から開放されてほっとする）というが、日本は二宮尊徳の像に見るが如く、また徳川家康のように「重い荷物を背負うが如し」と働き者だが、小さくなった上着を脱いでホッとするとはなんと気楽なことよ！そういえば、腹回りが合わなくなり、小さくなった上着なんかとっくに処分してしまっているので、筆者も肩の荷を下ろしているのかな。ホッ！訂正、フーッ！

日常生活でよくあることだが、「金を借りた方は忘れがちだが、貸した方は貸した先を決して忘れない」に相当するこんな表現がある。

“Planduk melupakan jerat, tetapi jerat tak melupakan pelanduk.”（鹿は罫を忘れることがあるが、罫は鹿を忘れない）。

そうは言うけど、一般善良庶民の場合は小銭は貸した方も案外忘れっぽいものなんだよね。